

2000年代半以降の中国大型商業銀行の国際化要因

呉博宇（鹿児島大学）

要旨

本研究は銀行国際化の要因に関する代表的な Follower 説と折衷理論に基づいて、2007 年以降、中国の大型商業銀行の国際化要因を検証した。まず、立地優位性（ホスト国の要因から銀行の海外進出要因を見る）の観点から中国の大型商業銀行の国際化要因を探った。ここでは、2007 年から 2019 年までの 13 年間、58 のホスト国・地域の包括的パネルデータを用いて検証を行った。結果は、中国企業の FDI が中国大型商業銀行の海外ネットワークと強く関連していることが明らかであった。こうして中国の大型商業銀行の海外進出要因として、Follower 説が適合的であることを検証できたが、これは近年の実証研究と同じ結論であった。また、ホスト国が華僑の主たる居住地であるかどうかを説明変数に加え、重回帰分析で 2007 年、2012 年、2017 年、2019 年のクロスセクションデータを検証した。検証の結果、ホスト国・地域が華僑・華人の居住地であるという事実が、中国大型商業銀行が海外拠点設立する際の要因となっていることが判明した。次に、所有優位性（海外進出を行う銀行の特性）の観点から国際化要因を検証した。ここでは、対象銀行 5 行の 2007 年から 2019 年までのパネルデータを用いた。検証の結果より、海外進出経験はもちろん、収益力が高い銀行が国際化水準も高い、という結論が得られた。一方で、中国の商業銀行において、資産規模自体は、国外進出の際の所有優位性もしくは国際競争力の源泉ではなかったという結果が示唆された。中国の大型商業銀行は、近年、世界トップクラスの資産規模を誇り国際銀行市場の注目を集めたが、そうした資産規模自体は、国外進出の際の所有優位性もしくは国際競争力の源泉ではなかったものと考えられる。

そして、2007-2019 年間の 4 つの時点を取ってクロスセクションデータ分析を行った結果この期間において、中国大型商業銀行の国外進出要因が変化したことを明らかにした。即ち、当初は、経済自由度が高く、地理的距離が近い進出先を選好していたのに対し、近年は、現地市場の収益性及び華僑との繋がりを重視するようになったことが明らかとなった。こうした変化を明らかにできたことで、「中国の銀行業国際化を説明する際の欧米多国籍銀行論の妥当性」の有無に関する先行研究の不整合についても、独自の解明ができたものと考えられる。この問題に関するより詳しい議論については、今後改めて展開することにした。